

第5章 古墳時代中期長頸鏃の展開 ― 熊本県を中心に ―

三好 栄太郎

はじめに

長目塚古墳は熊本県域において最大級の規模を誇る前方後円墳であると考えられ、その位置付けは非常に重要となる。そこで、本稿は古墳時代中期後半⁽¹⁾の長頸鏃の編年を検討することによって、今回再整理を行った長目塚古墳前方部石室出土の鉄鏃について年代的な位置付けを与えることを目的とする。

検討においては、主に熊本県内出土の鉄鏃を用いる。これは、鉄鏃が地域生産可能なものであるため、地域的に検討することが必要であると考えたからである。また、このような地域的な検討を行っていくことによって、後期に比べて全国的に斉一性が高いとされる中期の鉄鏃の様相をさらに明らかにしていけるものと考えている。

1 長頸鏃の部分名称 (図1)

はじめに、長頸鏃の部分名称について確認しておく。長頸鏃本体は鏃身部、頸部、茎部の3つの部分からなる。鏃身部は鉄鏃の先端にある刃部を有した部分で、頸部とは鏃身関で区切られる。ただし、鏃身関が明確でないものもある。頸部は鏃身部と茎部の間にある長い軸状の部分で、長頸鏃の形態を最も特徴づけている。茎部とは頸関で区切られる。なお長頸鏃の中には、この頸部に鏃身部から独立した片腸袂を有するものがある。茎部は鉄鏃を矢柄に装着するために挿入する部分で、頸部よりも細い棒状を呈する。なお、茎部の外面には矢柄の木質が残存することも多い。

2 研究略史と本稿の着目点

古墳時代中期の長頸鏃はこれまで、どのような点に着目することで変遷が検討されてきたのかを簡単にまとめていく。

関義則は長頸鏃出現以降の鉄鏃全般を検討した中で、長頸鏃については鏃身関、頸関、鏃身部の形状と造り、頸部の造りと様々な着目点から編年的検討を行っている。その中から中期のものに関して見てみると、頸関については長頸鏃出現時からある角関が5世紀末に消滅し、台形関がTK23～TK47型式期に現れるとし、角関から台形関、そして後期に棘関へという変遷観を示した。また、最初は鏃身ナゲ関であったものに続いて様々な鏃身関形状のものが出現するとし、腸袂を有するものはそれが浅くなっていくことを指摘した。それに加えて、中期段階の長頸鏃の頸部は断面正方形に近く、重厚かつ丁寧に作られていることなどを指摘している [関1986・1991]。

古墳時代鉄鏃を包括的に検討した杉山は、重量、頸関の形態、鏃身関の退化、鏃身部の造りという点に着目して長頸鏃の変遷を検討している。その中で中期の長頸鏃に関わるものとしては、鏃身部に腸袂を有さない長頸柳葉鏃の重量が軽くなる

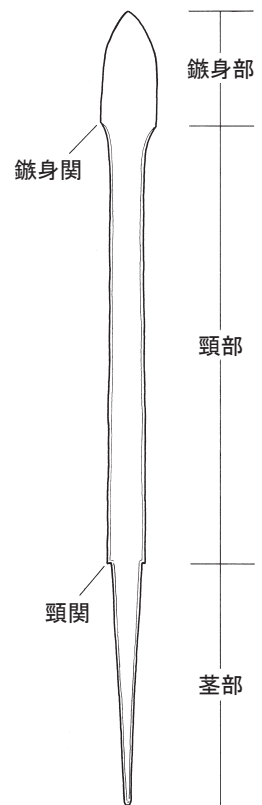


図1 長頸鏃部分名称

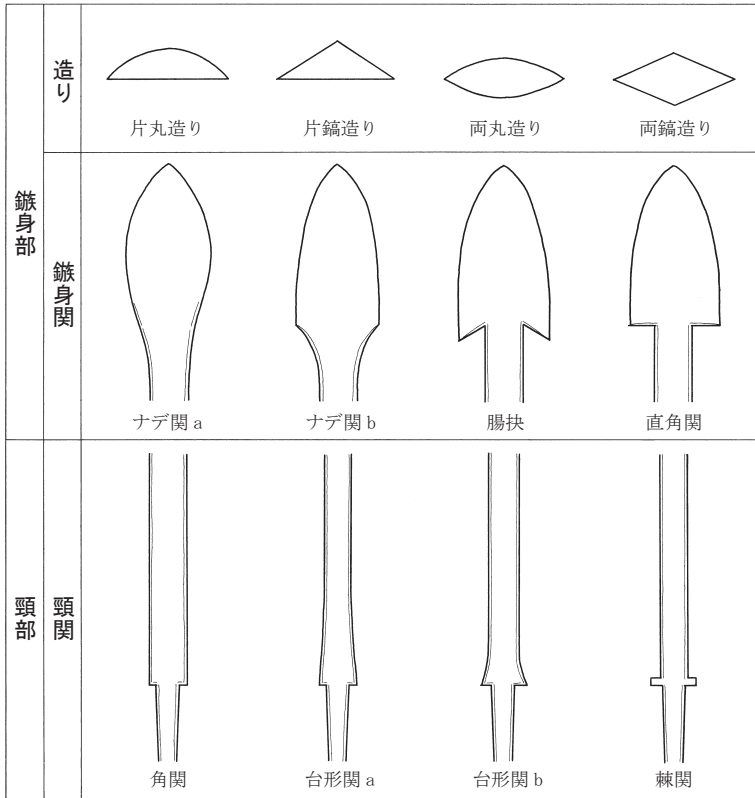


図2 鉄鏃各部位の分類

ということや、腸挟を有する長頸片刃鏃の腸挟が浅くなるということを指摘している [杉山 1988]。

水野敏典は古墳時代中期の鉄鏃について、近畿地方の鉄鏃を軸に据えながら編年を検討している。そこでは、鏃身部について、導入期の長頸鏃はナデ関で片丸もしくは片鑄造であるのが、次第に腸挟をもつものや角関、そして両丸造のものが現れるとしている。頸部については初期のものが太く重いもので、関も太い棒状であるのが、時期とともに断面が長方形化して幅も狭くなり、台形関が出現するとした。また全体的に長身化するが、中期の最後の段階には短いものも現れるとした [水野 2003・2009]。

鈴木一有は長頸鏃を定形化前と定形化後に分け、さらに短身化していくとした [鈴木 2003]。

川畑純は長頸鏃が短身化するとし、長頸柳葉鏃を鏃身～頸長 13.5cm 以上のものとそれ未満のものに分けた [川畑 2009]。

このようにこれまで中期長頸鏃の編年は、鏃身部においては造りや関、腸挟の深さ、頸部においては造り、頸関、長さといった、様々な着目点のもと検討されてきた。ただし茎部に関しては、あまり検討の対象とはされてこなかった。これは、上述したように矢柄に覆われていることが多いため観察が難しいことや、細く華奢なため完全な状況で残っていないものが多いことなどが原因であろう。

さて、これらの研究によって中期の長頸鏃の全国的な編年の大枠は定まってきたと言えよう。しかし、これが全国各地でそのまま適用できるかは別途検討が必要である。地域型式の存在などからも鉄鏃の在地生産は指摘されてきたことであり、今後は地域ごとに鉄鏃の編年を組み立て、全国編年と比較する取り組みが必要であろう。また、これまでの各研究者の変遷観には若干の齟齬も見られるようである。そこで、本稿では主にこれまでの研究で指摘されてきた属性に基づきながら、熊本地域における中期長頸鏃の編年を行う。そしてそれによって、長目塚古墳前方部石室出土鉄鏃の年代的な位置付けを行う。なお、属性の中で特に頸部は、各種長頸鏃の中で共通する部分であり、長頸鏃全体の変遷を考える上で最も注意すべき箇所であろう。

3 各部位の分類 (図2)

古墳時代中期の長頸鏃は、大きく長頸柳葉鏃、長頸片刃鏃に分類できる。さらに、長頸鏃には頸部に鏃身部とは別造りの片腸挟を有するものがあり、これは甲冑との共伴率や出土状況などから特別な鉄鏃という評価もなされてきた [関 1991, 鈴木 2003 など]。そのため、この一群を長頸独立片腸挟鏃として分類しておく。これらは鏃身部周辺の特徴が大きく異なることから、鏃身部に関して個別に検討する必要があるだろう。しかし、今回は資料数の制限からそれができないため、鏃身部に関しては長頸柳葉鏃を中心に検討していく。

それぞれについて個別に検討するのは今後の課題としたい。ただ、次節で各古墳から出土した鉄鏃の様相を見ていく際には、参考として長頸片刃鏃と長頸独立片腸抉鏃も鏃身部について記述していく。

以下、長頸鏃の各部位について分類を行う。

鏃身部の造りは、片丸造り、片鑄造り、両丸造り、両鑄造りがある。ただし、鑄があるものとないものの区別は難しいことも多いため、表1では片丸・片鑄造りと両丸・両鑄造りの2者に分けている。

鏃身関は、ナデ関と腸抉を有するもの、直角関があり、さらにナデ関は明確な変化点を持たないナデ関a、明確な変化点を持つナデ関bに分けられる。腸抉の深さによる分類については、資料数が少ないことから今回は行わない。

頸関については、頸部の幅が変わらず関に至る角関、角関と台形関bの中間的形態で頸部の下方が直線的に若干広がる台形関a、直線的な頸部の下端が台形状に広がる台形関bの3種類に分ける。ただし、中間的な形態である台形関aは角関、台形関bとの区別が難しいものもある。

出現期の長頸鏃は頸部が太いことが指摘されている。そこで頸部の太さについて、7mm以上の「太」、6～5mmの「中」、4mm以下の「細」の3者に分ける。計測するのは頸部の中位である。また、残存状態が良い鉄鏃の場合太さが0.1mm単位で報告されているものもあるが、すべての鉄鏃を同じ精度で計測できないため、それらは小数点第1位を四捨五入して1mm単位にすることとする。また、頸部の太さの分類には限界もある。頸部は5mm程度の太さであるため1mm違うだけで印象が変わるが、このような微細な分類は個体差や錆化の影響といったノイズを含みやすいと思われる。このことには注意をしておかなければならないだろう。

鉄鏃の長さについては、鏃身～頸長を用いる。これは、上述したように茎部の観察が困難なため、鏃身～茎部の長さを求めることが難しいからである。鏃身～頸長も1mm単位で表記するが、一括性が高い同形態の鉄鏃の中に個体差が認められることも多い。

4 熊本県内出土長頸鏃の様相

ここでは上で行った各属性の分類に基づきながら熊本県内の中期古墳から出土した長頸鏃の様相を見ていく。扱う資料には、その鉄鏃の全体が概ね把握でき、また他の遺物などによって時期をある程度判断できるものを選択した。

(1) 長目塚古墳前方部石室 (図3)

本書掲載の資料である。白川上流域の全長100mを超える前方後円墳で、その前方部の石棺系石室から鉄鏃が出土している。鉄鏃以外の出土品には埴輪、須恵器、土師器、銅鏡、鉄刀、刀子、鉄斧、玉類などがある。

鉄鏃の詳細は本書第2部の報告にまとめてあるが、短頸片刃鏃1種類、長頸柳葉鏃2種類が確認できる。ここでは長頸柳葉鏃について見ていく。

長頸柳葉鏃には鏃身関がナデ関aのものとナデ関bのものがある。仮に前者を長目塚古墳の1類、後

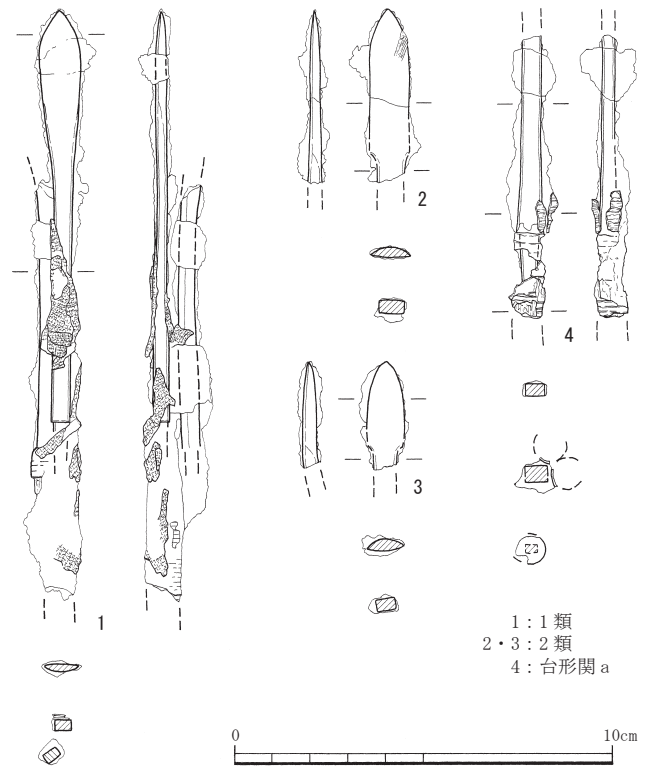


図3 長目塚古墳前方部石室出土鉄鏃

者を同2類としておく。鎌身部の造りは1・2類ともに片丸造り、頸部中位の幅は1類が5～6mmで「中」、2類が5～7mmを測り「中」～「太」に分類される。頸関は角関と台形関aがあり、確認できるものは1類が角関、2類が台形関aである。1類の鎌身～頸長は11.0cmと11.6cm、2類は11.2cm～12.9cmである。

(2) 上生上ノ原4号石棺 [西合志町史編纂協議会編 1994, 片山 2006, 西嶋 2012] (図4)

上生上ノ原遺跡は合志市に所在する合志川流域の遺跡で、複合遺跡であるが古墳時代に属するものには円形周溝墓などがある。4号石棺の盛土は削平されており、棺蓋の上に甲冑が置かれ、石棺内部に鉄鎌と鉄刀があったとされる。

4号石棺出土鉄鎌として確認できるものには、長頸柳葉鎌2種類がある。長頸柳葉鎌は、長目塚古墳前方部のものと同様、鎌身関がナデ関aのものとなデ関bのものに分けられる。ここでも仮に前者を上生上ノ原4号石棺の1類、後者を同2類としておく。1類としたものには刃部の範囲に個体差が認められ、先端のみ刃を研ぎだしたものと、ふくらよりも下位まで刃を研ぎだしたものがある。両者ともふくらで鎌身部最大幅となりそこから下位はやや幅をすぼめつつ左右両辺平行に移行していくなど、刃を研ぎだしている範囲以外では形態的特徴が一致している。そのため、長頸圭頭鎌と長頸柳葉鎌の2種類があるようにも見えるが、両者は本来同じものと捉えていいだろう。ここでは、ふくらよりも下位に刃を研ぎだしているものがあることを重視して長頸柳葉鎌としておく。なお、今回は特に分類の対象とはしていないが、茎部は非常に長い印象を受けるものである。

さて、1類について見ていくと、

鎌身部の造りは片丸造であり、頸部中位の幅は6～7mm程度で「中」～「太」に分類できる。頸関は角関で、図示しているものの鎌身～頸長は13.0cmと13.1cmである。

2類も鎌身部の造りは片丸造りである。頸部中位の幅は6～7mm程度であり、「中」～「太」に分類できる。頸関は角関のようであるが、若干裾広がりになっているものもあり、台形関aとの区別が難しいものもある。基本的に角関を志向していると思われるが、ここでは角関～台形関aとしておく。図示しているものの鎌身～頸長は9.8cmと9.9cmである。⁽²⁾

なお、上生上ノ原4号石棺出土の鉄鎌として1類は7本、2類は10本確認できるが、それぞれ法量はここで示したものとほぼ変わらないものである。

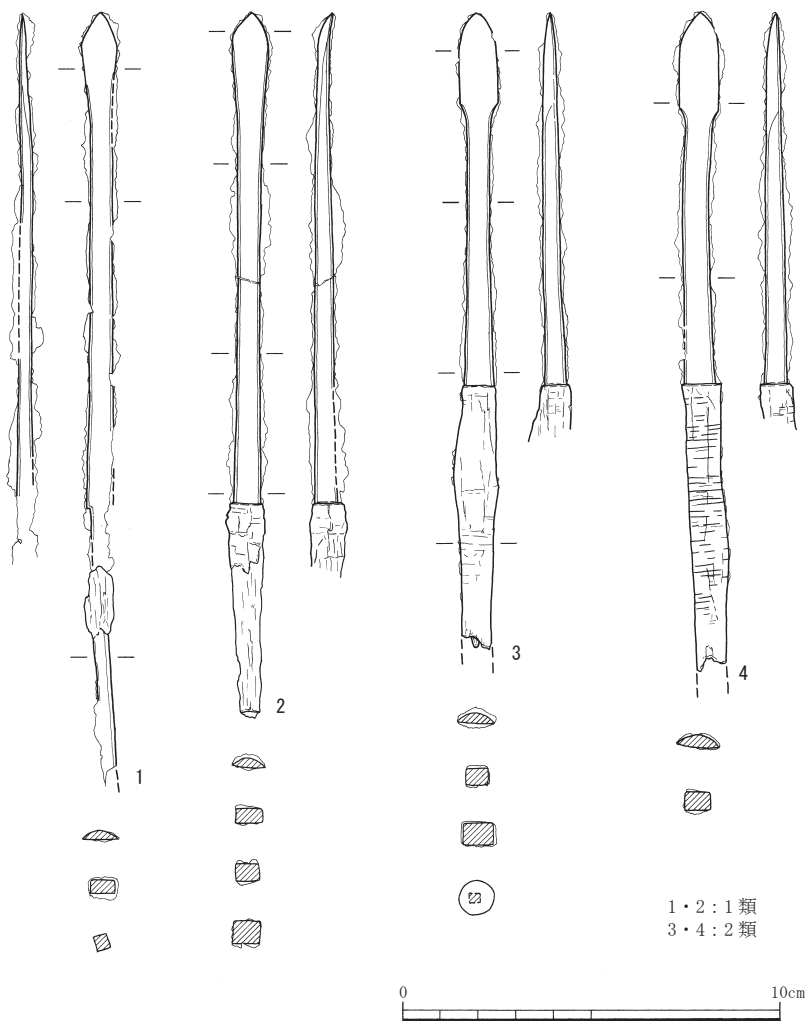


図4 上生上ノ原4号石棺出土鉄鎌

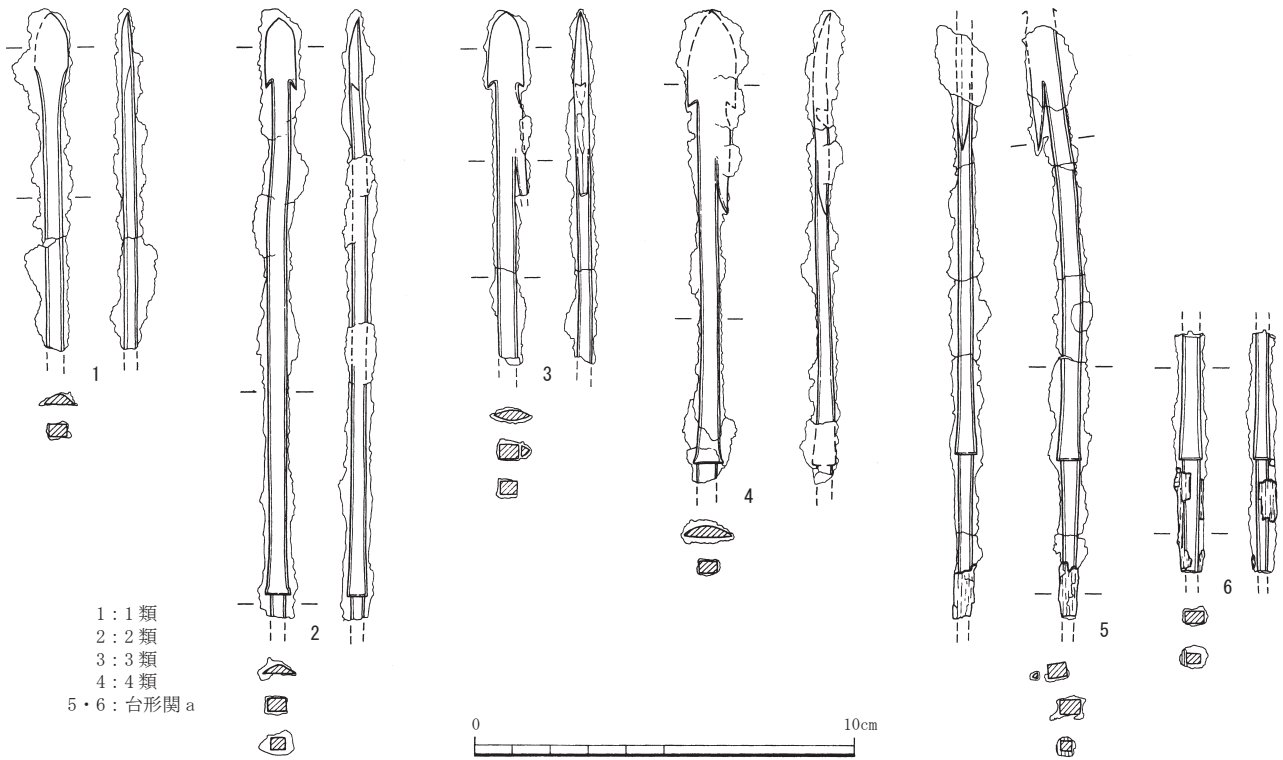


図5 カミノハナ1号墳出土鉄鎌

(3) カミノハナ1号墳 [米倉編 1982, 杉井編 2009] (図5)

カミノハナ古墳群は上天草市の永浦島に存在する古墳群で、埴輪や甲冑などが出土した古墳群として名高い。1号墳は長径 13.2m の円墳で、カミノハナ古墳群中最大の規模を誇る。主体部は両袖式の横穴式石室で、出土遺物には鉄鎌のほか埴輪や須恵器、冑、鉄剣、刀子、鉄斧、玉類がある。鉄鎌は 40～50 本が玄室床面からまとまって出土したとされる。ただし再整理によって鉄鎌には時期差があることが指摘されており、すべてが一括性の高いものではないと判断される。

遺物の再整理報告では最小個体数 56 点分の鉄鎌が確認されており、長頸柳葉鎌 2 種類、長頸独立片腸袂鎌 2 種類、長頸段違い鎌、平根系の腸袂柳葉鎌がある。このうち、後期のものと考えられる長頸段違い鎌と、長頸鎌ではない腸袂柳葉鎌は、対象外としておく。

長頸柳葉鎌は鎌身関がナゲ関 b のものと、腸袂を有するものがある。前者をカミノハナ1号墳の1類、後者を同2類としておく。1類は鎌身部の造りが片丸造り、頸部中位の幅は 5mm 程度とされ、「中」である。頸関や鎌身～頸長が分かる資料はない。一方2類は、鎌身部の造りが片丸～片鑄造り、頸関は台形関 b である。頸部中位の幅は 5mm 程度であるとされ、「中」に分類される。鎌身～頸長が判明するものは1点のみであるが、15.5cm と長大である。

長頸独立片腸袂鎌は鎌身部の造りを軸に2種類に分けられ、ここでは両丸造りのものをカミノハナ1号墳の3類、片丸～片鑄造りのものを同4類としておく。3類は鎌身関部に腸袂があり、頸部中位の幅は 5mm であるとされ、「中」に分類される。頸関まで残存する個体はないが、頸部が最もよく残る個体の観察から鎌身～頸部長は 11.6cm よりも長くなるようである。報告者はこの3類の頸関として、台形関 a の可能性を指摘している。筆者もその可能性は高いと考えているが、いずれにせよ頸部のみ破片に台形関 a のものがあることは重要であろう。4類も鎌身関部には腸袂を有し、頸部中位の幅は 5mm 程度であるとされ「中」である。頸関は台形関 b であり、鎌身～頸部長は 11.6cm のものと 12.0cm のものが確認できる。なお、鎌身部の造り

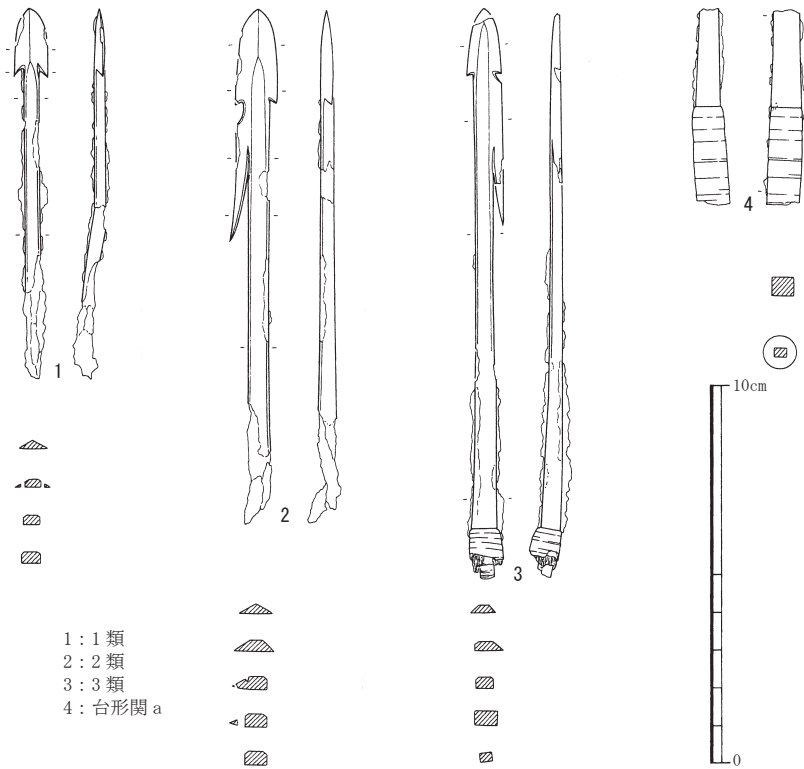


図6 マロ塚古墳出土鉄鍬

に平らな面がある4類には片腸袂の位置に左右の別があるが、カミノハナ1号墳の4類ではすべて右となっている。

(4) マロ塚古墳 [杉井・上野編 2012] (図6)

マロ塚古墳は確実な所在地が不明ながら合志川中流域にあると考えられており、遺存状態が極めて良好な鉄製品が出土したことで知られている。出土状況が不明なためそれにより一括性を判断することは難しいが、報告によれば、出土品には甲冑を中心に時期差を認めうるものの一時期に埋納された可能性が高いとされている。

鉄鍬は長頸柳葉鍬1種類、長頸独立片腸袂鍬2種類、平根系の圭頭鍬、

短茎鍬がある。これらのうち長頸鍬について見てみると、長頸柳葉鍬は鍬身関部に腸袂を有し、鍬身部の造りは片鑄造り、頸部中位の幅は4mm程度で「細」である。頸関や鍬身～頸長が分かるものはない。これをマロ塚古墳の1類としておく。長頸独立片腸袂鍬は片腸袂の位置に左右の2種類がある。ここでは片腸袂が左のものをマロ塚古墳の2類、右のものを同3類としておく。さて、2類は鍬身部の造りが片鑄造りで鍬身関部に腸袂を有し、頸部中位の幅は4～5mmで「細」及び「中」である。頸関の形態や鍬身～頸長が判明するものはない。3類も形態的特徴は2類とよく似ている。鍬身部は片鑄造りで鍬身関部には腸袂を有し、頸部中位幅は「細」及び「中」、頸関は台形関a、鍬身～頸長は復元値で13.8cm程度である。

(5) 江田船山古墳 [中原幸編 1986, 菊水町史編纂委員会編 2007] (図7)

江田船山古墳は、和水町に所在する菊池川下流域の古墳である。全長62mの前方後円墳で、後円部に妻入横口式家形石棺を直葬している。鉄鍬のほかに埴輪、須恵器、銅鏡、甲冑、馬具、鉄矛、著名な銀象嵌銘鉄刀を含む刀剣類、玉類、冠帽、垂飾付耳飾りなど大量の遺物が出土している。遺物の出土状況は不明である。

鉄鍬には長頸柳葉鍬5種類、長頸独立片腸袂鍬3種類があり、それ以外に短頸片刃鍬と考えられるものがある。このうち、頸関が台形関bであるものの棘関に近い長頸柳葉鍬と、鍬身部長が長く鍬身～頸長が短いと考えられる長頸柳葉鍬は後期のものであろう。そのためこの2種類と短頸片刃鍬は対象としない。

対象とする長頸柳葉鍬は鍬身関がナデ関のものと腸袂を有するものの2種類がある。さらに前者は鍬身部が両丸造りと片丸造りのものの2種類があるようである。そこで、鍬身関がナデ関で両丸造りのものを江田船山古墳の1類、鍬身ナデ関で片丸造りのものを同2類、そして鍬身関部に腸袂を有するものを同3類としておく。鍬身ナデ関で両丸造りの1類は頸部中位幅が6mmで「中」である。頸関などは不明である。鍬身ナデ関で片丸造りの2類も頸部中位の幅は概ね6mm程度で、「中」に当たる。頸関は残存状態の良いものが少ないが、台形関bであると考えられる。鍬身～頸長が分かるものはないが、最も残りが良いものを参考にす

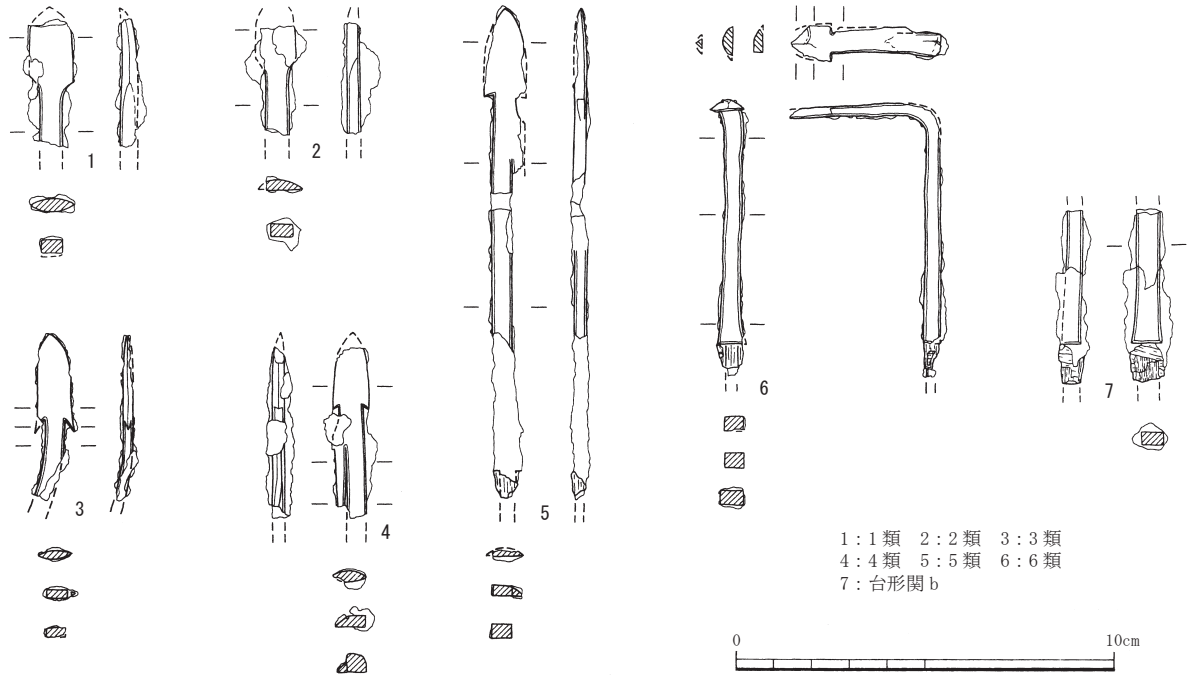


図7 江田船山古墳出土鉄鎌

ると10～11cm程度であろう。腸袂を有する3類の鎌身部は両丸造りであり、頸部中位の幅は5mmで「中」、頸関や鎌身～頸長は不明である。長頸独立片腸袂鎌は、鎌身部が大きいものと小さいものの2者がある。この両者は鎌身部の大きさだけでなく独立片腸袂の切込みの深さにも違いが認められるようである。さらに鎌身部が大きなものは、両丸造りのものと片丸造りのものに分けられる。そこで鎌身部が大きく両丸造りのものを江田船山古墳の4類、鎌身部が大きく片丸造りのものを同5類、鎌身部が小さいものを同6類としておく。鎌身部両丸造りの4類は、鎌身関部に腸袂を有し、頸部中位の幅は5mm程度で「中」である。頸関や鎌身～頸長は不明である。鎌身部片丸造りの5類は鎌身関が直角関、頸部中位の幅は5mmで「中」である。頸関は台形関のようであるが、aとbの別は不明である。鎌身～頸長は12.3cmと推定される。6類は鎌身部の造りが片丸造り、鎌身関が直角関である。頸部中位の幅は5mmで「中」に分類され、頸関は台形関b、鎌身～頸長は10.1cm程度である。

(6) 石川山8号墳 [中原幹編 1996] (図8-1)

石川山古墳群は熊本市北区植木町に所在する合志川流域の古墳群である。8号墳は直径9.5mの円墳で、主体部は両袖式の石障系横穴式石室である。遺物は鉄鎌のほか土師器、須恵器、曲刃鎌、刀子、玉類などが出土している。

鉄鎌には長頸柳葉鎌1種類のほか、平根系の腸袂柳葉鎌、圭頭鎌、方頭鎌、そして短茎鎌がある。

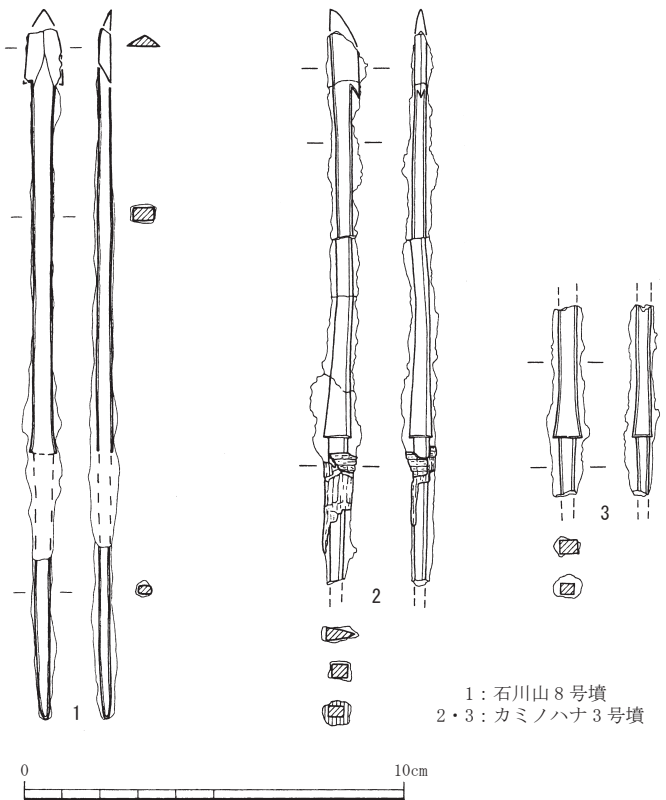


図8 石川山8号墳・カミノハナ3号墳出土鉄鎌

長頸柳葉鏃の鏃身部は片鑄造りで鏃身関は直角関、頸部中位の幅は5mmで「中」となる。頸関は台形関bで、鏃身～頸部長は復元値で11.8cm程度である。

(7) カミノハナ3号墳 [米倉編1982, 杉井編2009] (図8-2・3)

カミノハナ古墳群中にあり、尾根の結節点上に位置する直径12mの円墳である。主体部は1号墳と同じ両袖式の横穴式石室で、鉄鏃のほか須恵器、短甲、鉄刀、刀子、玉類、耳環が出土している。鉄鏃は玄室の右袖石付近から右側壁にかけての床面で散乱した状態で出土したという。

遺物の再整理報告で最小個体数9点分の鉄鏃が報告されており、長頸片刃鏃のほか、平根系の腸袂柳葉鏃と圭頭鏃がある。ここでは長頸片刃鏃を対象とする。

長頸片刃鏃の鏃身部の造りについては、片丸や両丸などの区別はない。鏃身関部には腸袂を有し、頸部中位の幅は4mmと「細」に分類される。頸関は台形関bであり、鏃身～頸部が完存しているものはないが、復元長で11.4cm程度を測る。

(8) 小結

長頸鏃のもつ要素を出土古墳ごとに分類してまとめたものが表1である。これらは、長目塚古墳前方部石室例と上生上ノ原4号石棺例の第1グループ、カミノハナ1号墳例とマロ塚古墳例の第2グループ、江田船山古墳例、石川山8号墳例、カミノハナ3号墳例の第3グループという3つのまとまりに大きく分けることが可能である。

それぞれのグループの特徴を見てみると、長頸柳葉鏃の鏃身部については、第1グループでは造りが片丸・片鑄造りのみで、両丸・両鑄造りのものは認められない。鏃身関は腸袂を有したものと直角関のものはなく、ナデ関aとナデ関bである。特にナデ関aについては他のグループに認められないことが注目される。第2グループでも長頸柳葉鏃の鏃身部の造りは、第1グループと同様に片丸・片鑄造りのみ認められる。一方鏃身関には、ナデ関bに加えて腸袂を有したものがある。上述したようにナデ関aはない。第3グループでは、鏃身部の造りに片丸・片鑄造りとともに両丸・両鑄造りが存在している。鏃身関は、第2グループで見られ

表1 長頸鏃各要素分類一覧表

	古墳名	種類	鏃身部造り		鏃身関				頸関		頸部中位幅			鏃身～頸長	種類
			片丸・片鑄	両丸・両鑄	ナデa	ナデb	腸袂	直角	角	台形a	台形b	太	中		
1	長目塚古墳	1類												11.0cm、11.6cm	長頸柳葉鏃
		2類												11.2cm～12.9cm	長頸柳葉鏃
	上生上ノ原4号石棺	1類												13.0cm、13.1cm	長頸柳葉鏃
		2類												9.8cm、9.9cm	長頸柳葉鏃
2	カミノハナ1号墳	1類													長頸柳葉鏃
		2類												15.5cm	長頸柳葉鏃
		3類												11.6cm～?	長頸独立片腸袂鏃
		4類												11.6cm、12.0cm	長頸独立片腸袂鏃
	マロ塚古墳	1類													長頸柳葉鏃
		2類													長頸独立片腸袂鏃
		3類												約13.8cm	長頸独立片腸袂鏃
3	江田船山古墳	1類													長頸柳葉鏃
		2類												約10～11cm?	長頸柳葉鏃
		3類													長頸柳葉鏃
		4類													長頸独立片腸袂鏃
		5類												12.3cm?	長頸独立片腸袂鏃
		6類												約10.1cm	長頸独立片腸袂鏃
	石川山8号墳												約11.8cm	長頸柳葉鏃	
	カミノハナ3号墳												約11.4cm	長頸片刃鏃	

薄いアミは可能性があるもの

たナデ関bと腸袂を有するものに加え、直角関も存在している。

次に頸部について見ていくと、第1グループでは頸関に角関と台形関aが存在し台形関bが認められない。頸部中位の太さは「太」～「中」である。鍔身関のナデ関aと同様に、角関のものと幅7mmに達する頸部のものは他のグループに認められない。第2グループでは頸関に角関が認められないが台形関aが存在し、これに台形関bが加わる。頸部中位の太さは「中」～「細」である。第3グループでは頸関が台形関bのみである。頸部中位の太さは第2グループと同様「中」～「細」である。

最後に鍔身～頸長について見てみると、第1グループでは9.8cm～13.1cmのものが認められる。比較的短いものから比較的長いものまで幅があると言えるだろう。第2グループには11.6cm～15.5cmのものがあり、11cm以下の比較的短いものは認められない。第3グループには10cm程度のものから12.3cm程度のものまでがある。13cm前後を計るような比較的長いものは認められないようである。

5 熊本県出土鉄鍔の編年

頸関の角関と台形関aが長頸鍔出現以前に盛行する短頸鍔において存在する一方、台形関bは短頸鍔に認められないことなどを考えると、第1グループから第3グループへの変遷が想定される。そこで、ここでは鉄鍔以外の遺物から想定される各古墳の時期を見ていく。なお、今回は中期の検討であるので、後期については特に触れていないが、カミノハナ1号墳・3号墳、江田船山古墳、石川山8号墳では後期の追葬が指摘されている。後期のものと考えられる鉄鍔は、前節で抽出して今回の検討から外している。

第1グループである上生上ノ原4号石棺からは三角板鋌留短甲が出土している。西嶋剛広はこの短甲について、様々な属性に新旧の様相を併せ持つことや特殊な形態などから、鋌留技法導入からさほど時間をおかない時期、須恵器型式で言えばTK216型式期のものと位置付けている〔西嶋2012〕。

第2グループのマロ塚古墳からは多くの遺物が出土している。報告では刀剣や鉄矛、貝製品、甲冑の各遺物について、可能性がある時期としてTK216～TK23型式期が想定されており時期幅がある。ただし、これらは一括性を持って埋納された可能性が指摘され、中心的時期はTK23もしくは遡ってTK208とされている〔杉井・上野編2012〕。ここでは、マロ塚古墳出土の鉄鍔がTK208～TK23型式期を中心とした時期のものと扱っておく。同じく第2グループのカミノハナ1号墳は、報告書で円筒埴輪がTK208型式期、鋳がTK208型式期、須恵器がTK23型式期に位置付けられている〔杉井編2009〕。よって、カミノハナ1号墳もTK208～TK23型式期を中心としたものと判断されよう。

第3グループの江田船山古墳の時期については様々な研究があるが、その中で特に重視されているのが須恵器であろう。須恵器はTK23型式に位置付けられ、他の遺物の様相とも合わせてこれが初葬の年代だと考えられている〔木村2007〕。また、甲冑からはTK23～TK47型式期が想定されている〔西嶋2012〕。よって、江田船山古墳出土鉄鍔はTK23～TK47型式期を中心とした時期のものと判断しておく。カミノハナ3号墳は、報告書で横板鋌留短甲についてTK47型式期、須恵器についてTK47型式期の年代が与えられており〔杉井編2009〕、TK47型式期のものと考えられる。また石川山8号墳は、報告書で土層や須恵器の検討がなされ、初葬がTK23～TK47型式期であるとされている。

以上のことから、第1グループがTK216型式期、第2グループがTK208～TK23型式期、第3グループがTK23～TK47型式期に当てることができ、時期差を認めることができるだろう。よって、各グループの様相の差は時期差を反映したものと判断し、ここでは第1グループ、第2グループ、第3グループの様相をそれぞれ1期、2期、3期と呼んでおきたい。そして、長目塚古墳前方部出土の鉄鍔はこのうちの1期、須恵器型式で言えばTK216型式の段階のものに当てはめられる。

ただし、各古墳の鉄鏃が必ずしも一括性を保証されたものではないことには、注意しておかなくてはならない。特に鉄鏃の形態にバリエーションが豊富なカミノハナ1号墳例と江田船山古墳例については、それぞれの鉄鏃の間に時期差があることも当然考えられる。また、検討対象の資料数が多くないことから、各属性の出現時期などについては今後変わってくる可能性もある。変化の方向性に大きな相違はないと考えているが、年代観などについては今後の資料の増加を待って再検討する余地があるだろう。

おわりに

本稿では古墳時代中期後半の長頸鏃について、特に長頸柳葉鏃を中心にしながらその変遷を検討し、3期に分けた。そして長目塚古墳前方部石室出土の鉄鏃は、このうちの1期に該当し、須恵器で言えばTK216型式期に並行すると結論付けた。最後に、今回着目した各属性の変化をまとめながら、その他気付いた点にも若干触れていきたい。

長頸柳葉鏃の鏃身部の造りについては、1期と2期には片丸・片鑄造りがあり、3期になると両丸・両鑄造りが出現するようである。

長頸柳葉鏃の鏃身関については、ナデ関aが1期のみに見られ、ナデ関bは1～3期まで継続して認められる。また、2期になると腸袂を有するものも出現する。直角関は今回3期のみ認められたが、資料数が少なく様相は明瞭でない。そのため出現が2期にさかのぼる可能性もあるだろうが、浅い腸袂が退化したものが直角関になると考えると、やはり腸袂を有するものの出現よりも遅れて3期以降に盛行するのではないだろうか。その一方、3期にも腸袂を有するものは存続する。

頸関は角関が1期、次いで台形関aが2期で消滅していきながら台形関bへと変遷していく。本論の第2節で見たようにこれまで頸関は角関から台形関に変遷するとされてきたが、長頸鏃導入の段階から角関と台形関の中間的様相をもつ頸関が存在している。今回、台形関aと台形関bを区別することで、頸関の変遷に関してよりスムーズに説明を行えるようになったと思う。なお、形態的特徴からは角関から台形関a、そして台形関bへという変遷が想定されるのに対して、長頸鏃導入段階からすでに角関と台形関aが並存している。これは変化が短期間に早く起きたというよりも、短頸鏃にすでにその両者が認められることから、そこからの連続性を想定するべきだろう。近年、短頸鏃から長頸鏃への変化の飛躍性が明らかにされてきた〔鈴木2003、水野2003など〕。そこで説明されてきたように、長さが急激に伸長化することや鏃身部形態の型式学的断絶性、そして計測値により長頸鏃と短頸鏃が分離可能なこと〔西岡2005〕などから、筆者も長頸鏃導入には大きな画期があると考えている。しかし一方で、このように短頸鏃からの連続性も認められることは重要であろう。つまり、長頸鏃導入の際には飛躍性とともにも短頸鏃からの連続性も認められる。今回上生上ノ原4号石棺の2類としたものは、長さ以外においては短頸鏃の形態に非常に近い長頸鏃であると言えるだろう。1類のような短頸鏃とは隔絶した形状の長頸鏃がある一方で2類のような長頸鏃が見られることは、長頸鏃と短頸鏃の間の連続性と非連続性が現れているとも考えられる。

頸部中位の太さについては、7mmの太いものは1期にのみ見られるようである。2期には4mm程の細いものが現れ、3期にもそれが引き継がれる。

鏃身～頸長は個体差があるが、現状では以下のような傾向が看取された。1期には比較的短いものから長いものまでバリエーションがあり、2期には11cm以上から15cmを超えるようなやや長いものに、そして3期には10cm程度から最大でも13cmには満たないやや短いものに偏る。

さて、このように見ると2期と3期の間には1期と2期のような明確な差を見出しにくいだが、これは両者の想定時期が部分的に重なっていることも大きな要因だろう。また、逆に1期と2期の間には型式的な

差が大きく、今後これを埋める資料が出てくることが予想される。今後、これらの様相をもっと明らかにしていく作業が必要である。

また、今後資料の増加を待って検討すべき課題も多いが、今回検討した変遷は、近畿地方の資料を中心に整理した水野の変遷観〔水野 2003〕と比較して大きく異なるものではなさそうである。このことは、中期に見られる鉄鏃の斉一性の評価や、当時の鉄鏃の生産と流通を考える上で重要であろう。

本稿を作成するにあたり、熊本県文化財資料室並びに担当の水上公誠氏には、資料の実測、掲載において多大なご協力、ご高配を頂きました。また、熊本市塚原歴史民俗資料館及び清田純一氏、杉井健氏、高木恭二氏には資料の収集においてご助言やご協力を頂きました。文末ながら、お礼申し上げます。

註

- (1) ここで言う中期とは、帯金式甲冑の存続期間〔橋本 2005・2010〕、集成編年では4期後半～8期〔広瀬 1991〕のことを指す。
- (2) 計測値から短頸鏃と長頸鏃の区別を試みた西岡千絵の検討では、鏃身～頸長が9cm以上かつ頸部長が6cm以上のものを長頸鏃と分類できるようである〔西岡 2005〕。長頸鏃の目安として鏃身～頸長10cm以上という条件が用いられることもあるが、1～2mmの差に大きな意味があるとは思われない。西岡の検討結果や全体的な形態的特徴などからしても、本例は長頸鏃として扱うのが妥当であろう。
- (3) ここで言う左右とは、鏃身部の平坦面を裏側として切先を上に向けた場合の左右である。

引用・参考文献

- 片山祐介 2006「林畔1号墳出土短甲について一定型短甲の型式学的再検討」『長野県考古学会誌』113号、長野県考古学会：pp. 17-40
- 川畑 純 2009「前・中期古墳副葬鏃の変遷とその意義」『史林』第92巻第2号、史学研究会：pp. 1-39
- 菊水町史編纂委員会編 2007『菊水町史』江田船山古墳編、和水町
- 木村龍生 2007「中九州における中期古墳の編年」『九州島における中期古墳の再検討』第10回九州前方後円墳研究会宮崎大会発表要旨・資料集、九州前方後円墳研究会：pp. 161-181
- 杉井 健編 2009「第Ⅱ部 カミノハナ古墳群出土遺物の再整理報告」『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究』熊本大学文学部：pp. 9-84
- 杉井 健・上野祥史編 2012『国立歴史民俗博物館研究報告』第173集 国立歴史民俗博物館
- 杉山秀宏 1988「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』第8号、橿原考古学研究所：pp. 529-644
- 鈴木一有 2003「中期古墳における副葬鏃の特質」『研究報告』第11集、帝京大学山梨文化財研究所：pp. 49-70
- 関 義則 1986「古墳時代後期鉄鏃の分類と編年」『日本古代文化研究』第3号、古墳文化研究会：pp. 5-20
- 関 義則 1991「逆刺独立三角・柳葉形鉄鏃の消長とその意義」『埼玉考古学論集』埼玉県埋蔵文化財調査事業団：pp. 683-709
- 中原幹彦編 1996『石川山古墳群』Ⅱ 植木町文化財調査報告書第8集、植木町教育委員会
- 中原幸博編 1986『江田船山古墳』熊本県文化財調査報告第83集、熊本県教育委員会
- 西岡千絵 2005「計測値からみた短頸鏃と長頸鏃」『古文化談叢』第53集、九州古文化研究会：pp. 47-61
- 西合志町史編纂協議会編 1994『西合志町史』資料編、西合志町
- 西嶋剛広 2012「熊本地域出土鋌留短甲の検討—編年の位置付けと配布の背景—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第173集、国立歴史民俗博物館：pp. 195-205
- 橋本達也 2005「古墳時代中期甲冑の出現と中期開始論—松林山古墳と津堂城山古墳から—」『待兼山考古学論集』都出比呂志先生退任記念、大阪大学考古学研究室：pp. 539-556
- 橋本達也 2010「古墳時代中期甲冑の終焉とその評価—中期と後期を分かつもの—」『待兼山考古学論集』Ⅱ 大阪大学考古学研究室20周年記念論集、大阪大学考古学研究室：pp. 481-501
- 広瀬和雄 1991「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』中国・四国編、山川出版社：pp. 24-26
- 水野敏典 2003「古墳時代中期における鉄鏃の分類と編年」『橿原考古学研究所論集』第14号、橿原考古学研究所：pp. 255-276
- 水野敏典 2009『古墳時代鉄鏃の変遷にみる儀仗の武装の基礎的研究』奈良県立橿原考古学研究所
- 米倉秀紀編 1982『カミノハナ古墳群』2 研究室活動報告14、熊本大学文学部考古学研究室

挿図出典

図1：筆者作成

図2：筆者作成

図3：本書

図4：筆者作成

図5：杉井編 2009

図6：杉井・上野編 2012

図7：菊水町史編纂委員会編 2007

図8-1：中原幹編 1996、2・3：杉井編 2009